総合都市研究　第50号　1993

# 青少年・高齢者・コミュニティ

## —研究テーマ（1985～1993）に関する覚え書き—

髙　橋　勇　悦*


### 要　　約

大都市のインナーシティ問題、高齢社会問題、青少年問題、およびコミュニティ形成の問題が、私がここ7、8年特に研究関心を向けてきた対象である。これらの諸問題は、それぞれに、今日なお焦眉の問題となっているといっていいであろう。大都市の超巨大化と「限界」の問題、高齢化の急速な進行と「元気老人」の社会活動・社会参加の問題、少子化と子どもの「成長」環境の問題、地域住民組織の「再生」と地域社会の役割の問題等、いずれも重大な問題である。これらの問題は、もちろん別個に研究できる対象であり、実際にそのような傾向も強くあるが、今日では特に、いわば一体的に、あるいは総合的に研究する必要に迫られている。高齢社会問題、青少年問題、コミュニティ問題は、もともと相互に深く関連しているが、その相互の関連を追求する中でこそ、これらの問題の研究がさらに深められるのではないか、と私は考えている。


### 1　インナーシティ問題研究[1)]

都市研究センター研究紀要『総合都市研究』は50号記念を迎えることになった。1977年11月創刊だから、ほぼ17年の歴史を歩んだことになる。『総合都市研究』に関係をもつようになって8年にしかならないのだが、この機会に、その8年間における研究テーマに関して心に浮かぶまま少しく書き留めておくことにする。

都市研究センターの都市住民・コミュニティ部門に私が専任研究員として着任した1985年当時、都市研究センターは、石塚裕道教授を所長として、その発足（1977年）当初から始まった総合テーマ「東京を中心とする大都市の総合的研究」プロジェクトの中期研究計画（1982～1988年の7年計画）を進めており、研究紀要の『総合都市研究』もすでに第24～26号を数えていた。その「東京を中心とする大都市の総合的研究」は、Ⅰ都市研究方法論、Ⅱ大都市地域における土地問題の研究、Ⅲ大都市居住の環境整備に関する研究、Ⅳ震災予防に関する総合的研究の4つのサブテーマグループに分かれていて、着任したばかりの私は、いわば中途から、ⅠとⅢのグループに名を連ねることになった。

しかし、それと同時に、倉沢進教授の示唆と協

＊東京都立大学都市研究センター

力のもとに、専任研究員、各学部や都庁職員の兼任・非常勤の研究員の参加を得て「インナーシティ問題の実態とその対策に関する研究」プロジェクトの研究グループ（倉沢進、園部雅久、高見沢邦郎、大石湛山、中林一樹、我妻照夫、渡戸一郎、石田頼房、望月利男）が作られ、私は研究担当者代表として研究活動の運営にあたった。インナーシティ問題は、当初から、国内・国外でいろいろ研究論議されていたものだが、東京のインナーシティ問題は、いわば東京独自の様相をもったコミュニティ問題などを内蔵していた。私は、インナーシティ問題の研究にできるだけ多くの時間をふりむけるように努めた。

インナーシティ問題研究は、定期的にインナーシティ（問題）研究会を開き、総合的・学際的な研究討議を行う（1985年7月、講師に伊藤滋東大教授を迎えて行われた第一回の研究会から開始したのだが、伊藤滋教授が石田頼房教授とともに高山英華教授の同期の門下生であることはその時まで知らなかった）一方、ワーキング・グループ（園部雅久、渡戸一郎、山本康正、竹中英紀、野沢慎二、牛島千尋、西沢晃彦の参加を得た）を作り、主として墨田区（特に京島地区）を対象として実証的に研究する、というかたちで進められた。実際の調査研究は、京島地区の一地域の全戸調査（面接調査）を1987年、墨田区住民サンプリング調査（面接調査）を1989年に実施した。都市研究センターには助手もいないし、大学院学生もいないから、人文学部研究室をはじめとする外部の協力がなければ、到底調査研究は不可能だった。それに調査研究費が少なかったので、研究開始当初（1985年）、日本住宅総合センターから研究費補助の交付を受けたりした。

私個人は、国内・国外のインナーシティ問題研究の文献にあたるとともに、東京（23区）の「インナーシティ問題」の実態をさぐる目的で、既存の統計資料を用いて「東京23区の変動分析（1960—1985）」を試みた。膨大な統計資料を整理・分析し、多くの統計表や統計地図を作成する作業に従事した。そういえば、1987年6月、都市研究センターは創立10周年を迎え、記念講演会（目黒校舎学館ホール）を開いた。テーマは「国際都市東京の現状と課題」で、倉沢進新所長の開会の言葉にはじまり、私が前座をつとめる羽目になって「東京都心の社会変動1960—1985」と題する話をした。その際用いた資料が「東京23区の変動分析（1960—1985）」のものであった。前座の私につづいて、石原舜介教授の「転換期を迎えた東京改造」と、宮本憲一教授の「多国籍企業段階における大都市問題」と題する講演があったのだが、有名教授を前に小さくなって講演したことが記憶にある。

こうした研究活動の成果は、『総合都市研究』の第34号（1988. 9）、第40号（1990. 9）に、それぞれ「特集　東京インナエリアの社会学的研究」として発表され、また、高橋勇悦編（牛島千尋、園部雅久、竹中英樹、野沢慎二、西沢晃彦、中林一樹、高見沢邦郎、石田頼房）『大都市社会のリストラクチャリング—東京のインナーシティ問題—』（都市研究叢書6）として結実した。この研究成果は、少なくとも東京下町（地域社会）の新しい構造的な変化（社会変動）を明らかにすることに成功し、学界にも貢献した、と思っている。

インナーシティ問題研究会は『大都市社会のリストラクチャリング』の発刊をもって終了ということになったが、ワーキンググループのメンバーを中心に、新しいメンバーも加わって、「大都市構造研究会」を作り、ひきつづき東京のインナーエリアの研究を行うことになり、その後も定期的に研究会を開いている。いずれ「大都市における都市構造の転換と社会移動に関する実証的研究」というテーマで科学研究費を申請し、再びフィールドの調査研究に着手する予定でいる。

## 2．高齢社会研究[2)]

都市研究センターは、1987年には倉沢進教授を所長として迎え、翌年からは所長自ら推進役を担って「大都市高齢社会の問題状況と政策課題の総合的研究」プロジェクト（1988～1991年の4年計画）を開始した。このプロジェクトは、Ⅰ高齢者の居住環境問題（安全班）、Ⅱ高齢者の地域生活

におけるサービス供給の実態把握と総合化方策に関する研究（サービス班）、Ⅲ高齢者の文化創造を促す生活スタイルと都市基盤に関する研究（文化班）、Ⅳ高齢者および高齢社会に関する基礎的な各種情報のデータベースの作成（データベース班）の４つのサブテーマの研究グループに分かれ、私は全体の研究活動の運営にあたるとともに、Ⅲの文化班（倉沢進、森岡清志、大串隆吉、琢磨武俊、加藤義明、針生誠吉、山本清洋、中林一樹、高見沢邦郎、直井道子、庄司洋子）に属し、研究を開始した。

この高齢社会研究は、高齢化が急テンポで進んでいる高齢社会・東京のハード・ソフト両面からの学際的・総合的な研究をめざしたものだが、従来の高齢社会研究の枠を超えるいろいろの問題提起を含んでいて、Ⅲの文化班の場合でいえば、「高齢者の文化創造を促す生活スタイル」というテーマ自身がそれを示していた。高齢社会研究会は、４グループ全体の研究会と、各グループの研究会との二種が開かれたが、文化班もこれらの研究会を定期的に開きつつ、研究活動に従事し、そのうち、私は主として、台東区・目黒区や東京23区の高齢者を対象としたサンプリング調査にかかわった。

高齢社会研究の全体の成果は、安全班、サービス班、文化班、データベース班がそれぞれ『総合都市研究』に多くの論文として発表し、またそれぞれ都市研究叢書としてまとめてきている*。私が直接かかわった研究活動の成果は、『総合都市研究』に「特集　高齢者の都市環境と生活文化」第39号（1990. 3）・「特集　大都市高齢社会研究」第45号（1992. 3）等の諸論文として発表されたが、さらに森岡清志・中林一樹編（高橋勇悦、庄司洋子、直井道子、浅川立人）『大都市高齢者のライフスタイル』（都市研究叢書９）としてまとめられつつある。これらの高齢社会の研究は、新しい視角からの実態の究明と課題の提示を行っていて、各方面の注目をひく内容を持っている、と考えている。

高齢社会研究は、プロジェクト研究としては、1991年に終了したが、私は現在も、日本生命財団の特別研究助成（特別プロジェクト「高齢化社会プロジェクト」、総合テーマ「高齢化社会における地域と企業のあり方に関する研究」1991～1993年の３年計画）を得て、「地域における高齢者の能力活用のための条件整備とプログラム」のサブテーマの研究グループを作り、ひきつづき高齢社会研究を継続し、その研究成果の発表も準備している。

＊都市研究叢書としてはすでに、秋山哲男編『高齢化社会の街とすまい』（都市研究叢書７、1992）、倉沢進編『高齢社会と盛り場』（都市研究叢書８、1993）が出版され、さらに森岡清志・中林一樹編『大都市高齢者のライフスタイル』（都市研究叢書９、1994. 3予定）、小林良二編『在宅福祉の現状と課題』（都市研究叢書10、1994. 3予定）の刊行が準備されている。

## ３．青少年研究

1985年、都市研究センターに着任する前、私が研究してきたテーマはいくつかあるが、その研究は着任以降も簡単に中止するわけにはいかず、ともかく継続した。その一つは、都市社会構造・類型の研究であり、科学研究費による『日本都市の歴史的類型に関する実証的研究』（1985）につづいて、全国の都市構造（類型）の変化と成長に関する実証的な研究（1988－1989年）に従事したり、長い間つづけてきた都市類型研究会の一応の研究成果を『現代都市の社会構造』（1990）にまとめたりした。その二つは、地域社会（コミュニティ）形成の研究であり、特に生活構造・生活様式との関連において、さまざまの理論的・実証的な研究を試みてきたが、都市研究センターの「都市住民・コミュニティ部門」専任研究員になってからは、インナーシティ問題研究でも、高齢者問題の研究でも、地域社会（コミュニティ）の視点からのアプローチを一層重視するようになった。その三つは、都市社会学説史に関する研究であり、これも、長い間、断続的につづけてきたものだが、それまで書いた論文を『都市社会論の展開』（1993）にまとめることも試みた[3]。

もう一つ、私がこれまで研究してきたテーマと

して、青少年（若者）の研究があり、これは現在の私の主要テーマの一つになっている。かつて私は「都市化社会の若者文化」（1973）という論文を書いたことがあり、それが契機となって、さまざまの青少年研究に従事し、かつ国や都の青少年問題審議会や協議会に関係するようになり、大都市の青少年問題に深い関心を持ちつづけてきた。1982年頃には、青少年（問題）研究会のグループを作って研究をつづけ、その研究成果は『青年そして都市・空間・情報』（1987）として、また『メディア革命と青年』（1989）・『青年の地域リアリティ感覚』（1990）・『青年文化の聖・俗・遊』（1990）の「シリーズ青少年」として世に問うた。現在も、科学研究費（1992～1994年の3年計画）による「都市と世代文化に関する実証的研究」が、青少年研究会のメンバーを中心に、東京・神戸などをフィールドにして展開している[4]。

「大都市高齢社会の問題状況と政策課題の総合的研究」プロジェクトのあと、都市研究センターのプロジェクト研究として、「大都市の地域経済構造変化に対応した環境の保全創造に関する総合的研究」プロジェクト（1992～1995年の4年計画）が、萩原清子教授の研究活動の運営のもとに開始されたが、そのうちの一つのグループを成す「大都市の地域経済変化と地域社会」の「都市社会班」（森岡清志、飯島伸子、石原邦雄、中林一樹、綿祐二、高橋勇悦）の研究の一環として、森岡清志助教授と私は「教育と友人関係に関する調査」研究をすすめている。これは、大都市の職業構成の変化、特にホワイトカラー層の変化とネットワークの関連を、子供の教育環境を中心に、母親の意識調査を通して、究明しようとするものである。私のこの調査研究での関心は、青少年の教育環境（成育環境）の変化と地域社会（親・子の地域活動）との関連の問題にある。

## 4．青少年と高齢者

私は、都立大学に転任してから、まだ10年に満たないが、研究の関心は、この間に、青少年・高齢者・コミュニティの問題の統一的な把握の方向に向くようになった。従来、青少年の問題は高齢者の問題とは別に研究してきたし、高齢者の問題も同様に、青少年問題とは別に研究してきた。しかし、私の頭の中では、青少年と高齢者の問題が同居しており、しかも、どちらの問題も地域社会（コミュニティ）の問題と密接に関連している。こうして、否応なしに、青少年・高齢者・コミュニティが一つに結び合わされ、私の現在の主要な研究関心となった。一般的に見ても、従来、青少年問題が高齢者問題との関連で研究・論述されることはあまりなかったのではないかと思う。青少年問題の研究はもっぱらそれ自体の問題として研究され、高齢者問題も、同じように、高齢者問題それ自体として研究される傾向が強かったように思う。

現実の変化も、高齢化が急テンポで進むなかで、高齢化がいわゆる少子化（出生率の低下）と直接に連動することや、近未来（21世紀）の高齢社会が少子化時代の現在の青少年によって担われること、したがって、今日の青少年問題は高齢社会の問題に対応しつつ考慮しなければならないことが、否応なしに明確になってきたこともあって、青少年と高齢者の問題は、統一的に把握する必要がにわかに大きくなってきた。そのような流れの一つとして、実は、東京都青少年問題協議会も、1990年3月に東京都知事に対し『高齢社会に向けた青少年施策の基本的な考え方について―ともに生き・ともにふれあう共同社会をめざして―』という意見具申を行っている。私も参加しているのだが、以下は、それを念頭において私なりに考えていることである。

青少年と高齢者の現状を同時に同じ視野に入れてみると、多くの問題が浮上してくる。世代間の経済的負担の変化（年金などの所得）や高齢労働力の増大と若年労働力の減少にともなう労働力需給の問題などはよく指摘される問題にされるが、青少年・高齢者のライフスタイルの問題や世代間の交流の問題もある。

青少年・高齢者の両世代のライフスタイルや交流が問題になる背後には、もちろん、日本社会の大きな変化がある。激しい産業化・都市化が進行

した経済の高度成長の時代を通して、産業化・都市化時代の要請に適合する青年・壮年の労働力の価値は大きく評価され、時代に取り残されるような高齢者の労働力は貶価されるようになった。これがもっとも大きな変化であろう。この時代に強化された受験体制において支配的となった偏差値重視の考え方も、あたかも時代の要請に適合し、青少年の「ふるいわけと落ちこぼれ」の生活価値観の基盤にすらなったように見え、これは、旧来の高齢者がもつ生活価値観をこえて、青少年の高齢者に対する見方に大きく影響したといっていいであろう。また、家族の多様化・単純化が進行するなかで、高齢者の生活は単独化・個人化（高齢者世帯の分化、「ひとり暮らし」の増加等）の方向に分化するかたちになったことも大きい。さらに、高齢者と青少年の生活が分化するとともに、例えば高齢者文化と若者文化が分化し（若者が集まる「原宿」と高齢者が集まる「原宿」―巣鴨の「とげぬき地蔵」―の分化もある）、ある種の格差も広がり、それが両世代の相互の無干渉、無関心の温床ともなったということもある。そういった状況のなかで青少年と高齢者の社会的な地位と役割は大きく変化し、ライフスタイルも変容した、と思われる。

かなり政策的な課題になるが、こうしたなかで、高齢社会における、青少年・高齢者にとっての快適な生活、あるいは青少年の人間的な「成長」に望まれる生活をめざすならば、取り組むべき課題は、少なくとも高齢者・青少年の新しいライフスタイルの形成（新しい価値観の形成）、新しい「教育」の推進、および世代間交流・社会参加の意図的・計画的推進を考えなければならないであろう。新しいライフスタイルの形成には、高齢者・青少年の自助・自立、高齢者・青少年の新しい社会的地位・役割およびリーダーシップの確立、新しい高齢者像の形成の問題等が、新しい「教育」の推進には、旧来の価値観の清算と新しい価値観にもとづく「教育」、青少年に対する「高齢社会」教育（「死の教育」も）、世代間の社会的・心理的距離の縮小の問題等がふくまれる。世代間交流・社会参加の意図的・計画的推進には、世代間交流・社会参加の社会的評価の確立、家族・地域での交流の促進、交流空間・施設・機会の創出の必要等の問題がある。

これらの課題は、高齢者と青少年の世代を軸とする社会的分化に対して、いわば社会的統合（あるいは社会的混合 social mix）の意味をになっている。社会的分化の潮流のなかで、社会的統合を考えるということは、いかにも困難なことではある。意図的・計画的ということは流れに逆らうことにもなりかねない。

## 5．青少年の「成長」と人間関係

高齢化が急テンポで進行しつづけ、高齢社会の問題はさらに深刻化しつつあるが、21世紀の高齢社会にむけて青少年問題を考えるとき、私が特に強い関心をもって研究テーマとしているのは、都市の人間関係の変容との関連における青少年の「成長」（「子どもの育成」、「子育て」）、つまり社会化（socialization）の問題である。人間関係の変質が青少年の「成長」に甚大な影響をおよぼし、従来とは異なる人間形成が進行しているのではないか、というのが私の観測である。これまでも、親子の「断絶」、エーリアン、新人類といった流行語のもとに、大人とは異なる人間形成を強調する傾向はあった。しかし、私が考えているのは、おそらく、従来考えられてきた大人と青少年のいかなる相違よりもはるかに大きい相違である。そこには当然、重大な問題が潜んでいるのではないか、という思いが強くある。私は、この問題をめぐって、かって「大都市青少年の人間関係の変容―1.5次関係の概念に関する覚え書き―」(1988)を書き、最近も「都市家族と人間関係の変容について―人間形成の問題にむけて―」（1994）を書いた。

日本人の生活は、経済の高度成長以後、それまでのライフスタイルを一新したといっていいであろう。子どもの生活でみても、耐久消費財やメディア機器（ＴＶ、ビデオ、ラジオ・ラジカセ、ステレオやＣＤプレイヤー、楽器［ピアノ、ギター等］、電話、ファミコン、パソコン、ＴＶゲーム、新聞、週刊誌・雑誌・単行本、漫画ぬいぐるみ、人形）

等のモノや、モノが提供する情報に取り囲まれている。また、子どもの生活は、誕生の時から、病院、保育所・幼稚園、習い事・学習塾、学校、その他の専門機関のサービスに依存する傾向を強めている。さらに、子どもの生活は、特に大都市においては、自然環境から遠ざけられ、もっぱら人工的な空間の中において営まれている。そして日常生活では、モノを作る（生産）よりも、モノやサービスを消費することが先行し、期待される「仕事」は偏差値重視の「受験勉強」のみであり、それ以外では、生活を楽しむ余暇志向が強い。そうした状況において人間関係をめぐり、注目すべき問題がいろいろ生じた。例えば次のようなことである。

(1)現在の親と子は、ともに経済の高度成長以後に生まれ育った、同じ「モノ世代」であり、「偏差値世代」であり、「余暇志向世代」であって、身近に育児に関する直接の体験・見聞も乏しい、まったく同じ環境に育っているために、親と子のタテの関係というより、子と子のようなヨコの関係が強くなっているのではないか。(2)両親の就業の増大、子どもの学習時間の増大（塾・習い事）、子どもの「遊び」の縮小、子どもの個室の一般化などが、子どもの個人化を促進し、人間関係の展開をかなり限定しているのではないか。(3)子どもの仲間集団（ギャング集団）の欠如や核家族の孤立化のため、親子の家庭生活への閉塞化の傾向があるのではないか。これは地域社会における人間関係を限定するにひとしい。(4)生活はモノに囲まれ、モノに頼り、家事・育児も、専門機関のサービスによって行われ、それだけ、家族内の「人間関係の省略」が進み、かわりに、「モノと人との関係」の比重が大きくなったのではないか。(5)生活は大量のメディア情報（疑似環境、イメージの世界）に囲まれるなかで展開し、そのため、人と人、人と自然との直接的なコミュニケーションの経験が乏しく、そのなかで「リアリティ」感覚が育っているのではないか。(6)生活環境の人工化（人工的空間）のかぎりない拡大と自然との日常的な接触の大幅な減少によって、やはりモノ（コンクリート、鉄、機械）との関係が拡大し、そこから子どもの「リアリティ」イメージが生まれているのではないか。

このような人間関係の変容は、人間関係の省略化・希薄化を意味しているだけでなく、第一次関係と第二次関係が共存するいわば1.5次関係といった新しい人間関係の形成を示唆するものとも考えられるが、重要なことは、子どもの成長が、このような人間関係の変容によって、どんな影響をうけるのか、ということである。人間はまさに「人と人との間で育つ」とすれば、これはかなり重要な問題である。子どもの非行や問題行動の問題もそうだが、いわゆる非社会的問題行動（無気力・無関心、自閉症、引きこもり、不登校、摂食障害等）の拡大は、この人間関係の変容と直接間接に関連しているように思われてならないのである。

可合洋『学校に背を向ける子ども―なにが登校拒否を生み出すのか―』(1986)、小此木啓吾『一・五の時代』(1987)、大平健『豊かさの精神病理』(1990)は、いずれも精神医学者の著書であるが、面白いことに、かなり共通した知見を披露している。すなわち、何よりも人間関係がモノにかかわりながら変質し、従来とは異なる人間関係が展開している、と考えられているのである。つまり、今日の人間関係は、人と人との関係というより、モノに代替される人間関係、モノ化された人間関係、モノを介した人間関係（ヒトをモノのように扱う関係）、いわばモノ関係に変質している、と見なされている。このモノ関係は、量的にはかなり煩繁に接触があるにしても、人間関係の希薄化を意味するものである。それは、喜びや感動に欠けるが、対立や葛藤も欠いているような人間関係である。

## 6．高齢者の社会活動

私の高齢社会の研究は、都市研究センターの高齢社会研究プロジェクトがはじめてであった。研究に着手してから、私が興味を持った問題の一つは高齢者の社会活動の展開である。高齢者に対する（高齢者自身も含めた）ボランティア活動が広

く関心を呼んでいることもあって、高齢者の社会参加の活動が注目されるのは当然であろうが、ただその場合、やや気になっていたことがあった。それは、高齢者（とは限らないのだが）の社会参加というのは、ボランティア活動のように何らかの社会的貢献をしている場合にかぎって言うことではないかというものである。つまり、例えばカラオケやテニスのような趣味活動は、社会参加ではなく、もっと極端に言えば、高齢者が一歩外に出ればそれは社会参加だというのは明らかにおかしい、というのである。確かに、社会参加をそのような意味で使用することがあり、その限りではそれは当然ながら正しい。気になったというのは、そのことではなく、社会参加をそのような意味にかぎって使用するとき、カラオケやテニスのような趣味活動は、ボランティア活動とは異なる活動であり、社会的意義も少ないとされかねないということである。

私は、趣味活動から住民参加、住民活動にいたるまで、広く社会参加と捉えており、カラオケやテニスのように趣味活動も独自の社会的意義を担っていると考えている。趣味活動も、高齢者の生きがいや健康に有効であり、いわば「元気老人」を育むのであって、そのことは、少なくとも間接的には、健康で生きがいのある高齢社会の形成に貢献することになる筈である。それだけではない。調査研究を通じて確認されたのだが、例えば、町内会に加入し近隣関係をもっているような高齢者は団体活動や趣味活動も活発で、親族関係・友人関係などももっているという傾向である。つまり、趣味活動も、社会参加と連動する傾向があるわけである。それで、想起されるのだが、子どもの場合でも、ファミコンで遊ぶ子どもほど外でもよく遊び、テレビもよく見るという傾向がある（『メディア革命と青年』1989）。活動のエネルギーは特定の領域（例えばボランティア活動）だけに集中する場合もあろうが、複数の領域にまたがる場合も少なくないのである。

高齢者の社会活動は、地域に深く関連する活動と、地域から離脱している活動の二つのタイプに分けるとすれば、一般的傾向としては、前者の地域活動タイプは自営業で地域に長く居住してきた高齢者に多く、後者の地域離脱活動タイプはホワイトカラーのような被雇用者で地域にあまり関心をもたなかった高齢者に多いようである。どちらの社会活動の展開も、今後の高齢社会にあっては大いに期待されることになろうが、特に後者の地域離脱活動タイプに注目しなければならないかも知れない。高齢者のソフトランディングが問題になるのは地域離脱活動タイプの多いホワイトカラー出身の「会社人間」である。

面白いことに、同じホワイトカラーでも、社会活動のタイプは、地域社会によって異なってくることがある。例えば、ホワイトカラーはどんな地域社会に居住していても、同じように近隣関係が少ないかと言うと、必ずしもそうではない。同じホワイトカラーでも、ある地域（例えば山の手）では近隣関係はわずかしかもっていないにしても、ある地域（例えば下町）では、他の高齢者と同じくらいの近隣関係をもっていることがある。地域社会の生活文化（地域文化）が、そこに居住する人々に大きく影響しているわけで、地域文化がいかに重要な意義をになっているか、はっきり示している。

私の当面の問題は、高齢者の社会活動はどんな条件にあれば活発に展開するのかというものである。「地域における高齢者の能力活用」はそれに含まれる一つの大きな問題である。

## 7．青少年・高齢者・コミュニティ

青少年問題にせよ、高齢者問題にせよ、それらの問題への対応において、地域社会への期待は非常に大きくなり、地域社会の役割が改めて再認識されるようになってきた。もともと地域社会は、特に大都市では、子ども、女性、高齢者の日常生活に密着していると見なされることが多かったから、その意味では当然なのかも知れない。しかし、高齢社会問題が大きく浮上し、それがかなり大変な問題を含んでいることが明らかになってきて、いっそう地域社会の役割が強調されるようになってきた。それだけではなく、青少年問題に関して

も、特にその「成長」過程における地域社会のもつ意義が再確認され、その方面からも、地域社会の役割が強調されている。いわば新しい「地域の教育力」への期待である。青少年問題や高齢者問題に関する地域社会の役割は、政策的にも、また、社会学的にも、改めて注目の的になり、「熱い」期待が寄せられ始めたのである。

さらに、これと深く関連していることで、高齢者問題、青少年問題、環境問題等において、企業の社会的貢献や社会参加、従業員のボランティア活動が言われ、コーポレート・シティズンシップが叫ばれるようになって、企業の地域社会への参加だけではなく、従業員の地域活動への企業の支援も期待されるようになった。これは、人々が地域社会の活動に関心を向けるのに役立つだけでなく、「会社人間」から「地域人間」への「変身」の契機になりうるもの(?)として、注目に値するといえよう。

しかし、地域社会は、現在、これらの期待や注目に応えられるだけの実体を、どれだけ持っているのであろうか。経済の高度成長時代以降、地域社会の変動は大きく、地域社会は「変容」・「解体」を迫られると同時に、いわゆるコミュニティ形成という課題を抱え込んできた。

こうした中で、地域社会はもちろん千差万別の形態をとり、いろいろなタイプの分類が可能だが、おそらく従来の分類ではあまり目立たなかったタイプの地域社会も増加してきている。

東京の場合、すでに周知の通り、人口構成からいえば、夜間人口の減少とともに高齢者の比率が大きく青少年はかなり減少している地域や、昼間人口は膨大な数になるが夜間人口はほとんどゼロに近くなる地域（それでも「住民」組織は存在する）、あるいは外国人が増大しその影響が大きい地域など、いわば新しいタイプの地域社会がいろいろ登場してきている。これらの地域社会は都心やその周辺（インナーエリア）に特に多い。

住民組織からみれば、端的に言うと、伝統的な町内会・自治会の活動が活発な地域がある一方、近代的なボランタリー・アソシエーションの活動が活発な地域もある。しかし、町内会・自治会はどこにも存在する住民組織の代表だが、地域社会の急速な状況変化に対してかなり形骸化・形式化を余儀なくされていると見るむきもある。それに、ボランタリー・アソシエーションの活動は、かなり多様であり、地域社会をこえるネットワークを広げ、かつ全体としては新しい展開をはじめてまだ歴史は浅い。

地域社会と住民生活の関連を住民の地域活動として捉えて、その関連が相対的に深い地域と浅い地域に分けることができるのだが、いずれにしても、東京の場合は、全国の市町村と比較すると、どうやら住民の地域活動は、総じてもっとも低率・低調である。つまり、ある程度予想されることではあろうが、東京は、地域社会と住民生活の関連は、一定の局面（スポーツのクラブ・サークル、宗教団体、住民運動等）を別とすれば、もっとも薄いのである（日本社会事業大学『高齢者に関するコミュニティ意識の研究』1992）。

こういった地域社会での青少年や高齢者の社会活動の展開はかなり困難な問題をともなうことは明らかである。そうだとすると、高齢者問題にかぎらず、青少年問題に関しても、今のままでは地域社会に「熱い」期待を寄せるのは無理ということになりそうである。そうならないようにするためには、公的機関、民間機関、地域社会の相互システムを含む地域社会の形成が必要になろう。それは如何にすれば可能か、これも現在の私の課題である。

日本で地域社会の住民組織の問題について考えるとき、町内会・自治会の問題には多かれ少なかれ触れざるを得ない状況がある。従来、町内会・自治会は日本のどの地域にも存在し、原則として全住民を会員とする組織で、多面的・包括的な機能を果たし、地域社会の構造・機能を究明する上では、好むと好まざるとにかかわらず、無視できないものであるからである。新しい地域社会（コミュニティ）の形成の問題では、新しい住民活動・住民運動が中心におかれ、町内会・自治会は地域問題に対応しえないものとして、必ずしも評価されなかった。しかし、一頃の住民活動・住民運動の高まりが静まった今日、町内会・自治会はやは

り住民組織の代表格として、依然、活動をつづけ、時に活発に活動しているところから、いわば日本的な住民のエネルギーの発現形態として、再び注目するむきもある。海外の住民組織の研究もいろいろと蓄積されてきて、日本との比較研究も可能になってきた。

町内会・自治会は都市社会学では長いこと研究・論議されてきたテーマであり、私も地域社会を研究する時は、町内会・自治会について、ある程度までは調査してきた。インナーシティ問題の調査研究でも、研究調査の枠として町内会を選定している。また、私は、山本英治東京女子大学教授を代表とする科学研究費（1991～1993年）の「沖縄地域社会の構造と機能ならびに地域連関についての実証的研究」グループの一員に加えられ、「那覇市住民の社会関係と生活」のサブテーマのもとで、那覇市の「自治会」の調査研究に手を伸ばしてきた。それに、「大都市構造研究会」では、私は「インナーエリアにおける住民組織の変容とコミュニティ形成」をサブテーマとし、やはり町内会・自治会を研究してみたいと思っている。

しかし、これまで、私は町内会・自治会を正面から取り上げて論究する機会を持つことはなかった。いずれ近いうちにまとめて論究してみたいと念願している。

研究テーマに関して振り返って見ながら、都市研究センターの専任研究員として、都市研究センターのプロジェクトのテーマの連続性と個人の研究関心の関連の問題について、改めて考えさせられた。都市研究センターの特徴となっているプロジェクト研究のテーマは、研究期間とともに適切に決めなければならないが、もちろん継続を必要とする場合もあろうし、変更を必要とする場合もあろう。これに対して、個人の研究関心は通常は連続的に推移するのが普通であろう。問題は、そのようなプロジェクト研究のテーマと個人の研究関心との関連であって、この両者の関連の問題をどう処理するか、場合によっては必ずしも容易ではないように思われる。

## 注（1985年以降）

**(1)インナーシティ問題研究**

高橋勇悦「東京23区の変動分析（1960―1985）―その1／人口・人口動態・世帯―」『総合都市研究』第31号、1987. 9

高橋勇悦「東京都心の社会変動1960―1985」『総合都市研究』第33号、1988. 3

高橋勇悦・園部雅久「インナーシティ問題の構造分析」『総合都市研究』第34号、1988. 9

渡戸一郎・牛島千尋・高橋勇悦「東京インナーエリアの史的過程―墨田区K地区の事例―」『総合都市研究』第34号、1988. 9

竹中英紀・高橋勇悦「大都市インナーエリアにおける社会移動と地域形成―東京・墨田区K地区調査（1987）より―」『総合都市研究』第34号、1988. 9

野沢慎司・高橋勇悦「東京のインナーエリアにおける近隣関係―墨田区K地区調査より―」『総合都市研究』第34号、1988. 9

高橋勇悦「東京23区の変動分析（1960―1986）―その2／産業人口・事業所―」『総合都市研究』第37号、1989. 9

高橋勇悦「東京インナーエリアの都市問題と住民意識―墨田区の事例―」『総合都市研究』第40号、1990. 9

野沢慎司・高橋勇悦「東京インナーエリアにおける地域社会の多元性―パーソナルネットワークからの再構成―」『総合都市研究』第40号、1990. 9

園部雅久「居住地立地限定層の生活構造」『総合都市研究』第40号、1990. 9

西沢晃彦・高橋勇悦「住宅階層と地域問題の認識過程―東京墨田区における―」『総合都市研究』第40号、1990. 9

竹中英紀・高橋勇悦「東京インナーエリアにおける地域問題とまちづくり意識―墨田区住民意識調査（1989）より―」『総合都市研究』第40号、1990. 9

高橋勇悦編『大都市社会のリストラクチャリング―東京のインナーシティ問題―』日本評論社、1992. 3

**(2)高齢社会研究**

木下栄二・高橋勇悦「大都市高齢者の学習・文化活動」『総合都市研究』第39号、1990. 3

高橋勇悦・森岡清志・中林一樹・木下栄二「大都市高齢者の文化創造に関する調査の概況」『総合都市研究』第39号、1990. 3
浅川立人・高橋勇悦「都市居住高齢者の社会関係の特質―友人関係の分析を中心として―」『総合都市研究』第45号、1992. 3
安藤究・高橋勇悦「大都市高齢女性の祖母性」『総合都市研究』第45号、1992. 3
高橋勇悦「大都市高齢社会の生活スタイル―東京都心部高齢者実態調査概況報告―」『総合都市研究』第46号、1992. 9
高橋勇悦「大都市高齢者の地域参加型とその特質―東京23区の調査事例―」『総合都市研究』第46号、1993. 9
高橋勇悦「高齢社会と地域社会―地域社会への期待と現実―」、中林一樹・森岡清志編『大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社、1994. 3（予定）

**(3)都市構造・類型/コミュニティ/都市社会学説の研究**

高橋勇悦『日本都市の歴史的類型に関する実証的研究』（東京学芸大学）、1985
高橋勇悦「都市型社会への移行と生活様式の変化」『都市計画』136、日本都市計画学会、1985. 7
高橋勇悦「都市型社会のライフスタイル」『住民活動』50、あしたの日本を創る協会、1986. 8
高橋勇悦「新しいコミュニティ形成の活動と組織―まちづくりの新しい動き―」『行政システム研究』'88 II、地域行政システム研究所、1988. 3
高橋勇悦「地域社会」本間康平他編『社会学概論（新版）』有斐閣、1988. 9
『地域構造の変化と都市の成長』地方自治協会、1989. 3
『都市成長パラダイムの転換―地方中枢・中核都市の成長と自立に関する調査研究委員会報告―』地方自治協会、1990. 3
高橋勇悦編『現代都市の社会構造』学文社、1990. 4
高橋勇悦『都市社会論の展開』学文社、1993. 3

**(4)青少年研究**

高橋勇悦「東京の青少年問題の動向」『調査資料55（青少年問題特集）』東京都議会議会局、1986. 12
高橋勇悦編『青年そして都市・空間・情報』恒星社厚生閣、1987
高橋勇悦「大都市青少年の人間関係の変容―1.5次関係の概念に関する覚え書き―」『社会学年報』XVII、東北社会学会、1988. 7
高橋勇悦「若者と地域社会」『行政システム研究』'89 II、地方行政システム研究所、1989. 3
高橋勇悦・川崎賢一編『メディア革命と青年』恒星社厚生閣、1989. 6
高橋勇悦・藤村正之編『青年文化の聖・俗・遊』恒星社厚生閣、1990. 1
高橋勇悦・内藤辰美編『青年の地域リアリティ感覚』恒星社厚生閣、1990. 9
高橋勇悦「子どもの遊びと地域社会」山本清洋編『都市と子ども』（都市研究叢書5）日本評論社、1992. 2
高橋勇悦「若者と都市空間」『都市問題研究』44-6、都市問題研究会、1992. 6
高橋勇悦「都市と子ども」『都市問題』83-12、東京市政調査会、1992. 12
高橋勇悦「都市家族と人間関係の変容について―人間形成の問題にむけて―」『社会学研究』61、東北社会学研究会、1994.

Key Words（キーワード）

Juvenile Problems（青少年問題）、Aged Society（高齢社会）、Community（コミュニティ）

# The Young, The Elderly, and The Community

Yuetsu TAKAHASHI

Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University
*Comprehensive Urban Studies,* No. 50, 1993 pp. 37—47

For several years I have been studying inner-city problems, community revitalzation, problems in aged society, utilizing the abilities of the aged, juvenile problems and child growth in the urban environment. These are all urgent problems facing Japan today. Limits to the growth of the megalopolis, the build-up of new communities, rapid pupulation aging, and the social activities of "healthy" aged people, the decline in birth rates and environment destruction are all important issues. These problems can, of course, be studied separately, but today we must study them together. The first thing that I think we must do is to study the interrelationship between these problems in the community. I am developing studies of the interrelationship among these problems, i. e., the interrelationship between the young, the aged, and community revitalization.